

伊能忠敬研究

季刊 史料と伊能図

一九九八年秋季 第十七号



伊能忠敬研究会

目 次

(表紙写真解説) 目次

表紙図解説 伊能忠敬記念館蔵 文化元年沿海地図大図 初図

卷頭エッセイ
伊能 敬君のこと

小倉 芳彦 1

トピックス 1

一九九八年度伊能忠敬研究会総会報告
「柴山日記」報道まで

中村 忠弥 2
堀田 希一 4

地域史料

第四次測量における加賀藩測量の実態
先触れ二題

河崎 倫代 6
渡辺 一郎 11

トピックス 2

ニッポンを歩こう 伊能本部隊員選考会

佐藤 嘉尚 13

史料紹介

伊能家文書紹介 十

●桑原隆朝 (つづき)

安藤由紀子 14

●山川湊の風

伊能 陽子 19

エッセイ

女めあかし様

忠敬さんは歩測がお嫌い 二

永野 達代 24

本図は大図の初図で江戸湾岸と北に向かう街道が描かれている。
國ではよく見えないが、測線は深川の黒江町を出発し、中川の御番所をとおってから千葉の沿岸に伸びている。測線の傍らの沿道風景は絵画的に描かれ、何某知行所と領主名が記されている。大図六九枚と、中図三枚の副本は伊能忠敬記念館に現存する。今後、「伊能図探求欄」で逐次紹介の予定である。

(渡辺)

〔題字は忠敬の筆跡〕

伊能図探求 十五
文化元年上呈 伊能大図

渡辺 一郎 32

大内 繁男 28

伊能 陽子 14

佐藤 嘉尚 13

渡辺 一郎 11

河崎 倫代 6

中村 忠弥 2

小倉 芳彦 1

伊能 敬君のこと

永年つきあつて来た同級の友人に先立たれた者の寂寥は、何によつて埋め合はせできるのか。伊能 敬が一九九五年四月七日に没してはや三年の月日がたつ。

伊能を含むわれわれの学年は、昭和十四年（一九三九年）の四月に旧制武藏高等学校尋常科に入学した。入学した日から「君たちをジェントルマンとして遇する」と言われたわりには、二年生まで半ズボンをはかされて、いささか冴えぬ姿の少年紳士だったが。

「支那事変」と称する中国への侵略戦争は泥沼化し、国際的な経済封鎖網で日本は日々息苦しさを増していた。昭和十六年十二月八日、「帝国陸海軍ハ西太平洋ニ於テ米英両國ト戦闘状態ニ入レリ」というラジオ放送は、そうしたモヤモヤを吹き飛ばす「快挙」と受け取られた。寒気の張りつめた校庭を歩きながら、伊能と私は「これは勝てる！」と低声で語り合った記憶がある。この開放感はわれわれだけの錯覚ではなかつたはずだ。

伊能が忠敬から七代目に当たることを知つたのがいつだったか覚えてない。身体は小柄だが、文武両道の達人で、左利きを生かして剣道では二刀流を使い、相手を悩ませた。テニスも相手の腕だったと聞く。音楽の才に恵まれ、自ら唱うとともに各方面のコーラスの指揮で活躍した。ペン画の写生も特技で、毎年の年賀状の版画は念入りの逸品だった。

われわれは文科と理科に道を分かつ、大学では伊能は化学を、私は東洋史を専攻した。昭和二〇年八月十五日の「終戦」の玉音放送を、伊能も私も東大安田講堂のラジオで聞いていた。そのことをかなり後になるまでお互いに知らなかつた。

卒業後、伊能は母校武藏高校に勤務し、フルブライト奨学金

でアメリカに留学、帰国して武藏大学の専任教員となつた。画才を生かした緻密な教材作りは、兼務した放送大学でも好評だったと聞く。剣道部の部長をむろん勤め、学生部長、人文学部長などの要職を歴任した。武藏と成蹊、成城、学習院の四大学間では運動競技大会などを通じて交流があるので、会合の席で一緒のこともあるたはずである。

武藏のクラス会準備のためと称して、伊能や私を含む十人ばかりが時々集まつては雑談する会を続け、それを「未央会」と名づけてから、はや十数年になる。その仲間で一九八五年に中國旅行を計画した。開放政策が始まりかけた頃のこと、一行は毎日のトラブル続きで、西安郊外では豪雨の中でマイクロバスが何度も立ち往生した。バスのステップを降りて雨の車外に出ようとする、ふつと傘をさしかけてくれる人がある。先に降り立つた伊能だった。さりげなく身についたそのマナーの優しさに私は深く打たれた。

一九九〇年の夏、検査で病気が見つかり、入院して手術を受けたが、翌年一月の未央会の伊豆韭山旅行には病後の身で参加してくれた。温泉の浴槽では手術の縫合の傷痕を示して、「まるでジッパーだよ」と苦笑い。翌日には三島に出て名物の鰻を食べてから駅に向かったのだが、その時の足取りの重さにわれわれは心を痛めた。

それからの伊能は入退院を繰り返して、未央会への出席も間違になつたが、剛毅を内に潜めたそのにこやかさは遂に失われなかつた。病魔がなぜ伊能の身体を狙い打ちしたか、私は今もつて納得できぬ気持ちでいる。

（おぐら よしひこ・学習院大学学長）

小倉 芳彦

一九九八年度伊能忠敬研究会総会報告

次に来賓祝辞。
この日の来賓の方々のご祝
辞を紹介します。

まず、佐原市・鈴木全一市
長「三年前、フランスの

去る平成十年九月十二日の十一時、佐原市中央公民館大会議室に
おいて一九九八年度伊能忠敬研究会の年次総会が開催されました。

当時は、「地図のまち・佐原、伊能ウォーカー出立記念式典」の日でも
あります。総会はこの式典に先立って午前十一時、芳賀理事の開会
宣言、そして議長団に大宮信篤(香取神宮権宮司)、神保誠(中敬の父・
神保貞恒家の当主)の両氏が選出されて議事が始められました。曇り
空ながら、九州など遠方からの会員も含め当日出席者は五〇名委任
状七六名計一二六名と報告され、総会は過半数をもって成立しまし
た。議案は原案通りすべて拍手をもって満場一致で承認され十一時
三〇分議事は無事終了しました。尚、当日発表された会員総数は
二〇三名です。

議事の内容は次のとおりです。

第一号議案・・・活動経過報告

第二号議案・・・九七年度までの決算報告

第三号議案・・・会則の制定

第四号議案・・・役員の選任

第五号議案・・・九八および九九年度活動方針と九八年度予算

(渡辺事務局長)

(清水理事)

以上の議事終了後、新役員を代表して小島理事の挨拶があつて、総
会を終わりました。

また、日本歩け歩け協会・江橋慎四郎会長「日本縦断プロジェクト
のきっかけは忠敬研究会の研究成果による。先日の東京江戸博での歩



総

測大会では、たくさんの歩測名人・達人が出た。来年一月二五日から忠敬ルートをスタートするが、これを契機に新しい人生再発見の場面を作りたい。二〇〇一年にイベントを成功させたい。」

締め括りとして朝日新聞社・中江利忠相談役(前社長)「来年一月二五日は朝日新聞創刊一二〇周年にある。伊能忠敬にあやかってこれを祝いたい。私も千葉県人である。五七年前、香取神宮で剣道の奉納試合があり、少年剣士として優勝した。一卵性双生児の兄弟に利孝がいる。忠孝「タダタカ」兄弟といわれた。忠敬に縁があると思う。」

このあと、渡辺代表理事より、原田関西支部長および石川九州支部長の紹介があり、総会行事はすべて滞りなく、かつ盛大な裡に終了しました。

なお、本報告をもって総会決議通知に代えさせていただきます。会則の表現の修正について、一部貴重なご意見をいただいていますが、今後、修正の機会に生かしていきたいと考えております。

また、総会の席上で、会員の陽光会会长・伊能静光氏の揮毫による伊能研究会の幟が披露され、静光氏から御挨拶があつた。

総会のあと、午後は千葉県知事、伊能ウォーカー名誉隊長・加藤剛氏等が出席して伊能ウォーカ用御用旗授与など記念式典とパネル討論があり、全員参加した。

さらに、記念式典の後、一八時より席を移して、「よくらや」の大米蔵のなかで懇親会があり交流を深めることができた。

(総務会計幹事 中村忠弥記)

御用旗を手に 加藤剛名誉隊長



「柴山日記」報道まで

堀田 希一

書き方次第で面白い記事になると予感させるお話をうけた。すぐに古書店に電話して、見せてほしいとお願いした。

行くと、店先になく、奥の方からだしてきた。二冊で三五〇万円の値札が付いていた。

驚いた。しかし、古書店主の高野肇さんは「売れます」と自信ありげだった。聞けば、東京・神田の古書市で仕入れて読み込み、値踏みに三年近くかけたという。

第六次測量隊員・柴山伝左衛門正弼の日記が、神奈川県小田原市の古書店にあった。面白い部分を紹介する形で、十月十三日付夕刊の記事にした。

反響は多かった。五〇代の測量士という読者は即日電話で、「反物を二、三週ごとに二、三反ずつ買った」理由を、隊員のふんどしにしたのだろう? と教えてくれた。他にも数本、好意的な電話をいただいた。□うるさい記者仲間も好意的だった。

こう評判がいいと心苦しい。

実はあの話、伊能忠敬研究会女性メンバーからのプレゼント。出所は伊能陽子さん、実地検分してくださったのは安藤由紀子さん、筆跡を比較してくださったのは浅井京子さんのお三方。紙面では安藤さんしか紹介できなかつたが、お三方のご協力やアドバイスがなければまともならなかつた。お礼申し上げます。ありがとうございました。

小生は三様の解釈や分析を聞いては、行けると思つたり、がつかりしたり。まるでエレベーターに乗っている気分でした。上げたり下げたりが、読者に伝わつたのです。

三五〇万円?!

伊能さんは、取材のきっかけを与えてくださつた。親戚の藤岡さん

(研究会会員) の親しくしていた古書店で売りに出しているという話で、「本物かどうかは知りませんよ」

念できた。

鑑定団大活躍

それにも奇妙な日記だ。

形は江戸時代中期以降、流行した懷中日記スタイル。ほとんど定番の半紙を四つ折りした表側に毛筆で書いたものだが、書き手が一人とは思えない筆跡の乱れがあった。しかも、虫食い穴を最新技法で補修したせいか、半紙がやたら厚かった。

見た直後は、安藤さんも小生も「売値が高い」と言った。もとから買うつもりがないにしては失礼な話だが、なんてバブリーな値踏みだと思ったのだ。

以後は、断片的に印象を伝え合った。

「本物にしては奇妙」

「でも、こんな偽書をつくるのは割が合わない」

「何で、途中で筆跡が違うのか」

二人とも、売り物だと知りながら遠慮がなかつた。堂々巡りみたいなチェックを繰り返しているうちに、どうやら柴山伝佐衛門正弼の日記らしいと安藤さんが読みとつた。しかし決め手がない。安藤さんも柴山を調べた記憶がないということだった。

どうしようかで、安藤さんに名案が浮かんだ。「伊能さんのところに、柴山の手紙があるから比較したら?」

写真を撮って現像し、送っていた柴山の手紙とともに浅井京子さんに見ていただくと、「これ、明らかに違いますよ」懸念してはいたが、がっかり。氣の毒に思ったのか、浅井さんはこう言った。「でも、偽書をつくるメリットはない。伊能測量隊の隊員

日記なんてマイナーなんだから、絶対にない。淨書本だと思う」

何のために淨書を?

「伊能忠敬さんは字が上手な方じゃないでしょ? これは草書まで崩れてはいませんが、行書と言つていい。読みやすいよう書き改めたんじゃないかしら」

なるほど柴山伝佐衛門正弼は達筆である。世田谷伊能家にある妙薫宛の手紙は、素人目にも見事な手だ。

日記は、筆運びがおぼつかない感じの二、三人の手だ。安藤さんは女性の手とおぼしき字まであると言う。「測量日記」をまとめるための淨書ならば、納得できる。

悩んでいるところへ安藤さんが、二度目の小田原訪問の成果を伝えたくださつた。「照合したところ、行動は全部合つていました。間違いないなく柴山の日記です」

淨書説を伝えると、「ええ、あり得ると思ひます。それでいいのではないかでしようか」

記事にして、渡辺一郎代表理事にコメントをもらつた。「安藤さんに責任を負わせるのが氣の毒なら、ボクの発言にしていいですよ」

記事は紙面を飾つた。柴山がどんな人物だったのか。なぜ、シーボルト事件で処罰されなかつたのか等々、調べたかたが手の回らない出来事は積み残した。が、とりあえず一件落着である。

この不況下にあの日記が本当に売れるのかどうか、気にはなる。安藤さんは、「だれかが買つたら見せてもらい、詳しく調べたい」と意欲を燃やしておられる。しかし、高野古書店が簡単に値下げしないとしたら、記事のせいもある。

第四次測量における加賀藩測量の実態

一

河崎 優代

だけなら、ひたすら海岸線を歩き続ければ事足りたはずだ。伊能測量隊が必ず各藩城下に立ち寄っているのはなぜか？ 幕府御用としての制度上の必要からか、忠敬の個人的関心・好みからか、それとも、他に理由があったのだろうか？

一 第四次測量は一大転換期

一八〇三（享和二）年の第四次測量は伊能忠敬全国測量事業の転換期であった。それまで「浪人」身分だった忠敬は、一八〇五（文化二）年の第五次測量から「天文方役人」に登用され、測量は幕府直轄の事業となつた。客観的に見れば、加賀藩測量はそのような転換期にふさわしく、特徴のあるものだつたともいえよう。

南北に細長く、かなり複雑な海岸線の能登半島を有する加賀藩測量は、六月二十四日（八月八日）（太陽暦八月十一日）～九月二十三日（までの四十三泊四十四日）（石川県内三十七泊・富山県内六泊）にも及んだ。次ページの地図は加賀藩領内での測量行程図である。（本稿では金沢藩とその支藩である大聖寺・富山藩を総称して加賀藩と呼ぶこととする）

この行程図でのポイントは

- ①支藩の大聖寺藩と富山藩では、応対・協力体制に特筆すべき点はないが、金沢藩では警戒心をあらわにし非協力的な対応だつた。
- ②能登半島では、今浜村から手分測量を実施した。

東海辺（内浦）・・・伊能忠敬・伊能秀藏・香取慶助・小野良助・

伊能吉兵衛の五名

西海辺（外浦）・・・平山郡蔵・村津大兄・僕久兵衛の三名

③「糸魚川事件」は加賀藩領を八月八日に出た翌日の出来事である。

④福井（地図外）・大聖寺・金沢・富山の各城下をすべて訪れている。

（いざれも海岸線から数キロ内陸にある。日本列島を描き上げる

二 「糸魚川事件」の伏線は加賀藩測量にあった

第四次測量での一大事件は「糸魚川事件」ということになっているが、ここ数年間の地元史料解説によつて、「糸魚川事件の伏線は加賀藩測量にあり」との確信を得た。結果的には、記録の残る「糸魚川事件」が大事件として扱われることになったが、忠敬が『測量日記』（本稿では千葉縣史料近世篇『伊能忠敬日記』を使用）に本音を記さなかつた加賀藩における四十数日間こそが、彼の全測量事業の中で最も不愉快・不本意なものだつた。これが私の結論である。

以後、数回にわたつて加賀藩測量の実態について述べ、その根拠を示してみたい。

三 先触による地元への要求事項の比較

『測量日記』の中の先触によつて、地元への要求事項を比較してみよう。①～③、「※」、傍線は筆者による。また、読みやすいように、適宜「・」や「、」を追加した。

(1) 越前・吉崎浦にて――拒否されるとは知らずにこれまで通り
「国郡村名・村高・家数」を要求
此所より加州橋立村迄泊觸を出、

一、我等儀就測量御用、明廿四日吉崎浦出立、大聖寺町迄罷越致止

「加賀藩測量行程図」



宿、翌廿五日同所出立、塙屋浦迄下り、夫より海辺通行、左之泊

付之通①宿用意有之、尤道筋測量致候間、②国郡村名・村高・家數等小紙ニ書記、順村先江差出、其③村内致案内可給候

(中略)

松平加賀守領分

同國同郡

安宅浦

從是断ニ付、高人家を書さず

午後安宅浦ニ着、止宿田端町網七左衛門、此夜曇天不測量

右領分界至十村大庄屋の番代と云者出て案内す、村高・家数等問とも領主より差図なしと不言、其外山嶋を問共不言、漸測量地の村名を聞のミ、此夜曇不測量、元吉町迄泊觸を出す

(2) 加賀・本吉町にて一加賀藩領では「国郡村名・村高・家数」を要求せず

宮腰迄泊觸を出、此日慶助出勤

覚

一、明廿九日本吉町出立、海辺通り測量、宮腰迄罷越致止宿候間、

①宿用意有之、尤二組ニ手分致し、壹組ハ当所相川村江罷越し、夫々宮越迄測量致し候間、右間之村々等も海辺其③村内致案内可給候、

(略)

同二日 朝々晴天、六ツ半頃宮腰町出立、「測量ニ量程車を用」

四ツ後ニ金沢城下尾張町へ着、止宿※住吉屋太兵衛、

※御手判問屋。現在も旅館「すみよしや」として存続。

(3) 越中・泊町にて一加賀藩領を出で、再び「国郡村名・村高・

家数」を要求する

泊町より泊觸を出す、則此所へ書記、前後者同案文ゆへニしるざず

覚

一、明八日泊町出立、海辺通測量、左之休泊順ニ罷越候条、①休泊幕府直轄事業となつた第五次測量では、どのような先触が出されたのだろうか。若狭小浜藩の「記録附留帳」(小浜市立図書館蔵『酒井家編年史料稿本』収録の若狭佐野・野崎家収集文書)には、第五次測量二年目の一八〇六年八月の先触が収録されている。

八月七日

伊能勘解由

八月十一日、是ヨリ先、幕府測量方伊能忠敬一行、山陰道雲伯沿岸ノ測量ヲ終リ、本藩若狭ノ海岸に及バントス、是日其先触ノ到着ニヨリ、小浜藩三方郡佐田村半太夫・早瀬村彦左衛門・佐野村卯左衛門ニ郡中ノ惣世話方ヲ命ス

覚

「記録附留帳」(若狭佐野 野崎胸太郎藏)

一、文化三年八月、御先触到来、公義御用御測量御役人御出被成候

一、御用御先触

覚

(中略)

一、右通行筋村々領主姓名・国・郡・村高・家数、及海辺町数、其外名所・旧跡・名産等、別紙案文雛形之通相認メ、前々泊り宿迄持參可有之候

(中略)

書上案文 朱書ニ而本美濃紙堅帳

一国限り歟、一郡限り歟、
一組限り歟、何レ組合限り一帳ニ可認事

堅 帳

一、高 何千何百何拾石何斗何升何合 何々誰領分 何国何郡何
村

一、家数 何百何拾軒 内 何百軒本村 何拾軒枝鄉字何
一、人数 何百何拾人 内 男何人、女何人

一、海辺長 何拾何町何拾間 但シ何村境方何村境迄

一、村長 東西何拾何町 南北何拾何町 内 何拾何町居村

何拾何町野間

一、御朱印高 何拾石 何社神主誰々

一、寺 何ヶ寺 内 何宗寺院 何宗何寺 何宗何院 何宗何庵

一、社 何々

一、名所 何々 旧跡 何々

一、古城跡 何山誰古城と不分ハ、誰古城と申伝へ候ト可認

一、名産 何々

一、居村 海辺迄何町 但シ居村海辺ニ候ハ、海辺ニ御座候認

一、当村 隣村何村、家居迄方角何、凡何町、其間田畠か山越しか

一、遠山見渡何山方角何、凡何里余

一、島幾ツ 何島 周り何拾何町、家数何軒、何村方海上何里

一、何島 周り何町何拾間、人家なし、何村 海上何里

右之通相違無御座候以上、何村庄屋誰印年寄組頭

何某守領分何国何郡何村何村

町六分図附札之是ハ絵図ヲタタミ上ノ表紙ニ

何某守領分何国何郡何村 但シ堀間六尺、一町六拾間、
一町六分之割絵図

大図凡例

○朱 町在人家 ○青山嶽草木 ○黄 沙浜 ○紫 田畠

○青 海川沼 朱 往還小路 丹朱 神社 ○朱輪斗 寺院

此図は大村ハ二ヶ三ヶ村、小村ハ五六七ヶ村、図面ニヨリテ紙
ト継合、勝手能可認

何某守領分何国何郡中引附絵図 是ハ絵図タタミ表紙ニ

一郡カ一組力寄合テ可認引附絵図分量不定

是ハ郡中案内之絵図此方ニ而郡中壹枚ニ致、小浜組屋ニ而指出ス

凡 例

□朱中白 本村 0朱中白 枝郷 ○青 山嶽草木 ○紫 田畠

○青 海川沼 ○黄 沙漠 1朱 往還 丹朱 宮祠

○朱ニ而輪斗 寺院 4朱 測量通路 1墨 国郡村界

右之通御先触到来、甚六ツケ敷様子ニ付、佐田半太夫・早瀬彦左衛門・佐野卯左衛門、右三人御呼出し被仰付、右御測量中三方郡

惣世話方被仰付、八月十日ニ出浜、十一日ニ右之趣蒙御意帰り申候

八月二十二日、幕府測量方伊能忠敬ノ一行小浜ニ到着ス、小浜藩三
方郡惣世話方ヲ増員シ、鳥浜村佐太夫・郷市村善太夫・川原市村弥
太夫ニコレヲ命ス

「記録附留帳」(若狭佐野 野崎胸太郎藏)

右ニ付三人申合、西浦筋甚以不案内之場所故、十六日ニ早瀬龍出西
浦ヘ罷越、則敦賀東浜町橋本道莫子息貞治郎と申絵師相頼同道致、
万丈ヘ登り、郡中引附絵図下拵ヘ致、夫レヨリ神子浦ヘ罷越、庄屋
治郎左衛門殿ニ一宿致、翌日舟ニ而常神ヘ参、夫方常神舟ニ乗小川
ヘ罷越、昼飯致、小川舟ニ而世久見ヘ参リ、夫レヨリ世久見舟ニ而
塩坂越ヘ参、海山ヘ越、海山舟ニ而沢寺下ヘ着舟致候而罷帰り候處、
十八日ニハ御測量方大飯郡ヘ御引移リニ付、十九日ニ出浜仕、御役

所方へ罷出、色々御相談申上候、内廿二日、右御役人方小浜へ御着

被成候ニ付、廿二日昼時分 組屋へ罷出、窺御機嫌申候處、右郡中引附絵図大ニ御意ニ叶候而、甚以首尾能納、甚以大慶致引取、其夜

直ニ御役所へ罷出、右之趣申達候 (後略)

※福井県敦賀市の岡田孝雄氏が、右史料を含む『伊能忠敬の文化三

(一八〇六) 年若狭・敦賀地方の調査・測量の実態について』「史料編」・「考察編」を出版予定なので、本稿では一部を紹介するにとどめる。

四 加賀藩の情報収集活動と領内への通達

(1) 幕府の通達

加賀藩が前述のような拒否的対応をした理由を探ってみると、幕府の最初の通達に行き着くようだ。『加賀藩史料 第十一編 享和三年』には次のように記されている。

二月十七日幕府勘定奉行小笠原和泉守より聞番呼立、天文方為測量

伊能勘解由東海道より御国元へ相廻り候に付、覚書を以被仰渡あり。

日記。十七日勘定奉行小笠原和泉守殿より、御城中の口へ今日御呼出に付、不破氏半蔵。為罷越候處、御勘定組頭田口五郎右衛門を以、天文方為測量伊能勘解由東海道より御国許へ相廻候に付、覺書を以被仰渡候。右勘解由は百姓躰浪人者にて、いまだ公邊へ被召出無之輕き者之由。

右の傍線部は加賀藩に限らず、第一～四次測量を受け入れた諸藩に共通した認識のようであり、その原因は幕府の通達にあったことがわかる。『弘前藩御国日記』には、忠敬の身分について「伊能勘解由儀、帶刀御免斗ニ而、格式等無之ニ付、諸家方中小位之格ニ而取扱可然旨』とある。(増村宏著『大谷亮吉著『伊能忠敬』の日本測量について』、保

柳睦美編『伊能忠敬の科学的業績』より)

(2) 情報収集活動

幕府の通達は国元の金沢へ伝えられた。加賀藩では測量隊の情報収集に努めるとともに、対応策の検討に入った。大聖寺藩では十村(他藩の大庄屋)手代が出入りの海運業者に情報収集を依頼した。この海運業者は敦賀の取引先へ飛脚を遣わし、敦賀近辺での測量や待遇の様子などの情報を入手し藩庁へ伝えた。このことは金沢市立図書館『加賀文庫』の『加賀藩十村役岡部家文書』「享和三年御用留」に綴られている。本稿ではその要点を次に記すが、史料全文は『加能史料研究 第5号』「伊能忠敬の加賀藩領内測量関係史料」(一九九三年三月)を見てほしい。(『加能史料研究 第6号』「加賀藩十村役の報告書に見る伊能忠敬の領内測量」と併せて読んでいただければ、加賀藩測量の実態がかなり鮮明になると思う。『加能史料研究』の問い合わせは、石川県立図書館史料編さん室まで。電話076-223-9579)

① 敦賀での様子

・測量隊の待遇は、町奉行が宿所へ見舞に出るなど、諸事予定より手厚くなつた。

・部屋は四室入用。上の二室は忠敬、中の二室は弟子四人、次の二室は家来三人、もう一室は道具衆置場。

他に九尺×五間半ばかりの地面入用。

・出迎えは庄屋・年寄。村の間尺・家数・石高・領分等を質問し、村役人押印の書付けを取るらしい→「六ヶ敷事ニ御座候」

② 加賀藩の対応

・村々の家数・村高等の書付けを提出しない。
・村境に杭木を打たない。

よそはよそ、加賀藩はこうだ、とばかりのお触れが領内に出された。

(つづく)

先触れ二題

渡辺 一郎

九月十二日

伊能勘解由手分け

平山 郡藏

継ぎ立て、測量手伝い人足案内等は村界に待ち受け、御用
差し支えこれ無き様取り斗らい給うべく候 以上

伊能隊通行の計画は、第一次測量では「勘定衆からの添え觸れ」、第五次測量以降
第二次から第四次測量までは「勘定奉行の先触れ」、第五次測量以降

は「老中からの先触れ」によって事前に村々に通知され、通行を援助
するよう指示されていたが、これをうけて忠敬も自分の先触れを發
して村々に要請をしている。日程がきまとると忠敬はさらに宿泊日を指
定して泊まり触れを発した。

先触れの控えは、いまでも各地の元大庄屋・庄屋宅などに可成りの
量が残っているが、形式はほぼ一定で変わったものは少ない。ここに
あげる二通は伊能測量がらみの少し変わった先触れである。

新穂より新町まで
右 間の村々

御役人中

追って申し入れ候、勘解由儀は夷町出立道筋測量致し候

間、手伝い人足案内の儀は早朝より村界へまかり出候様
取り計らい給うべく候 以上

(日本学士院蔵、伊能忠敬『測量野帳其他断片的書簡集』による)

先触れ 一

享和三年九月十二日 佐渡において 手分け隊の平山郡藏が發
した触書

「先触れ一」がのっている日本学士院の史料は写本で、大谷亮吉氏
が「伊能忠敬」を著した際に筆写させたものと考えられる。文言に分
からないところはないが、内容的に幾つか気のつくことがある。
この先触れの発出者・平山郡藏(一七七九—八一九)は忠敬の内
弟子でこのとき一四才、佐渡における手分け測量で分遣隊の隊長をつ
とめていた。

忠敬の第四次測量の際の身分は、幕府勘定奉行から苗字帶刀を許さ
れているが、天文方・高橋至時の門人ということであった。忠敬自身
の名前で、勘定奉行から与えられた証文の写しを添えて先触れを流し、
あと旅行日程が決まってから「泊まり触れ」を出して村々の支援をう
けっていた。

右は明十三日新穂町出立、新町までまかり越し候条、
宿用意これ有り、尤も人馬・駕籠・人足等は勝手宜しき方

平山郡藏の「触れ」は忠敬の先触れが出たあとの「泊まり触れ」と

覚

一、 馬 二匹
一、 駕籠 一挺
一、 測量器持人足 四人
一、 同 手伝い 三四人

おもわれるが、高橋の弟子の弟子が幕府御用の触れを出すことができたというのは意外な感じである。忠敬はいつも証文の本文を懷中にしていたが、証文を持たず、証文に名前もない弟子が「先触れ」を出すのは少し行き過ぎの感じがする。あるいは、そのくらい伊能測量が理解されていたと認識すべきであろうか。

郡藏は測量技術にも熟達していたし、二次・三次の測量でも、忠敬は作業隊より先行し、実際の作業は郡藏が指揮してあとから宿につくという記述が日記によく出てくる。郡藏が実務を仕切っていたとすれば、手分けの先触れ位出してもおかしくはなかったのである。

先触れからうかがえる隊内の郡藏の地位は副隊長といったところで第五次以降幕府直轄の測量隊となり、同心の下役を配属されてから、郡藏と下役たちとの折り合いが悪くなり、遂に郡藏は破門されるのだが、それまでの作業において、若年ながら腕を振るっていたので、しぜん態度がでかくなつて、その癖が御用測量隊になつてもぬけなかつたのではないか。これは何よりも忠敬が気を使わねばならない点でもあった。こんにちでも、小企業が大きくなつてゆく過程でよくおこることである。

このときの第四次測量で伊能隊に与えられた証文の人馬は人足五人、馬三匹、長持ち一棹（持ち人足四人）であるから、郡藏隊で馬二匹、人足四人をとると、忠敬隊は馬一匹、人足一人、長持ち一棹となつてしまふ。また、駕籠一挺と測量手伝い人足は証文には記されていない。つまり、この先触れは忠敬がどこまで知っていたかわからないが、非公式な先触れである。忠敬はこれまで、証文の人馬以上の協力をうけてきているのは事実である。しかし管見では、みずから要求した記録は知らない。忠敬が承知しているかどうかは別にして伊能隊側から証文以上の要求をした珍しい記録である。

いっぽう駕籠はいつたい誰のための用意であろう。まさか郡藏用ではあるまい。忠敬が無測量の移動の際に一部駕籠に乗つたことは、はつきりしている。しかし、もし郡藏がまねたとしたら、とんでもないことである。万一、病人が出たときの救急車がわりであろうか。もしに備えて駕籠を村方で用意した例は記録に出てくるところがある。だがこの隊は若者ばかりである。貴重品の運搬用かとも考えたがそれも不自然である。

測量手伝いは三人ないし四人か、三十四人か、はっきりしない。これも各地で村方から多數手伝いが出ているが、伊能隊が触れを出して要求した例はない（第五次測量で村方に口頭で伝えて心得触れを出させて問題になつた例はある）から、いずれにしても問題である。實際にはこの辺りでは人足は三十人くらい出ていた可能性は大きい。

いろいろ詮索してゆくと問題を含む「先触れ」である。その意味で大谷亮吉氏が筆写させたものであろう。

先触れ 二

覺

一 軽尻馬 式四

右は我等儀明後十一日佐原村出立、成田村泊り、同十二日朝同村より江戸亀島町測量御用所へ罷り越し候間御定めの賃錢これを受け取り、書面の馬滯りなく継ぎ立申さるべく候、尤も行徳より乗舟の積もりに候、船壹艘用意致さるべく、止宿の儀は着の砌申し談すべく候 以上

九月九日

成田より

酒々井

白井

大和田

舟橋

行徳

右村々宿々

「先触れ」は世田谷伊能家蔵のものである。忠敬が二回目の九州測量を終わり、黒江町の隠宅から八丁堀の亀島町に移って、地図御用所を開設してから後のものである。何かの都合で佐原に帰ったときのものであろう。

この先触れでは、忠敬の身分は高橋作左衛門（景保）の手附き手伝いとはっきり書かれている。天文方の手附きには、手伝いと下役の二種類あるが、忠敬は手附手伝だったことがわかる文書である。手伝いは与力と同格だったという。町奉行与力は二〇〇石で扶持米になおすと、二〇〇俵、ほかに役得もあって内福は豊かだったというが、忠敬は与力格でも四五俵、大分差があった。

景保の弟・高橋善助は第五次測量のみ副隊長格で従事したが、手附・手伝で身分上は忠敬と同格だった。また坂部貞兵衛は、はじめ手附き下役だったが、九州第一次測量から手附・手伝に昇格している。下役は従者をひとり連れているが、手伝になると与力格で、従者のほかに供侍一人をつれていた。もっとも高橋善助は供侍を連れていなかつた

から供廻りも厳密なものではなかつたかもしれない。
いずれにしても、忠敬の測量途上における村方の待遇は、上席の御家人として旗本とほとんど変わらなかつた。ここに掲げた先触れは、亀島町の頃には忠敬は、自分で公用旅行の触れを出して佐原から江戸まで、お定めの賃錢で旅行できる身分であったことを示している。
軽尻は荷物を少し載せて人間も乗れる馬で、忠敬と供侍の二人分の馬の用意である。名前は勘解由と書くのが本当だが、三郎右衛門と書いている。理由はよく分からぬ。

「ニッポンを歩こう 伊能本部隊員選考会」

いよいよ始まる「平成の伊能忠敬 ニッポンを歩こう」の核となる本部隊員の選考会が、十月三一日から十一月三日までの四日間、埼玉県東松山市を中心に行われました。

これは一九九九年一月から二〇〇一年一月までの二年間全コースを踏破するメンバー十五名を選ぶためのもので、渡辺一郎代表理事が選考委員長、佐藤嘉尚理事が選考委員として参加しました。

全国各地、遠くは韓国ソウル市から参加した本部隊員応募者二一名（内女性四名）は初日三十キロ、二日目と三日目は二十キロコースを歩き、全国踏破の足ならしをしました。

十一月二日には、伊能陽子、神保誠、吉野敏、永野達代、渡辺貞子の各研究会員も合流し、一緒に歩いた後、嵐山町の国立婦人教育会館において、渡辺、伊能、神保各会員がミニスピーチを行いました。夕方から全員で懇親会になだれこみ、大いに盛り上がり、伊能ウォーカーの成功を誓いました。

伊能忠敬研究会は、日本歩け歩け協会、朝日新聞社とともにこの壮大なイベントを主催しております。がんばりましょう。

（佐藤嘉尚）

桑原隆朝（つつき）

安藤由紀子

測量出発前のトラブル

十七年、十回にわたる日本列島の測量行はそれぞれ特色を持ち、比較してみると大変面白い。伊能忠敬の能力にたいする評価を幕閣がどう変えていったか、藩に対してもその評価を認めさせるため、どう対処したかがありありと分かるからである。

この内、第一・第二次の測量行の他との際立った違いは、出発前にトラブルがあったことである。幕府は「伊能忠敬」なる者について何も知らず、手探りの状態だったし、高橋至時と忠敬の師弟（間重富は大阪にいた）は、幕府にどれだけやる気があるのか、これまた手探りの状態だった。この薄暗がりの中に灯りをともした人物が、忠敬の義父にあたる桑原隆朝であった。両者の交渉が行詰ると、きまつて忠敬は桑原宅を訪れる。『測量日記』を抄録して、この辺の事情を考えてみよう。ともかく測量隊が富岡八幡宮に成功を祈願して歩き始める所まで読み進むと、やれやれと安心するほどモメるのである。

第一次測量出発前—寛政十二年

幕閣と至時・忠敬師弟の蝦夷地測量に対する思惑は大変ずれていた。幕府はロシアの南下に直面して、少しでも正確な蝦夷地の地図が欲しかった。高橋至時は緯度一度に対応する地表の距離をどうしても確定

したかった。これで地球の大きさが分かる。世界でもその確定値がなかったからである。なるべく遠い、正確な距離のわかる二地点の緯度を利用するわけだから、絶対に伏せておかなければならなかつた。

史料一 『伊能忠敬測量日記』より抄録（千葉県史料 近世篇）

2/15

高橋先生から急の呼び出しで、奥御祐筆・秋山様から伊能の身分と領主の氏名、持参する測器の数と大きさを問い合わせて来た由。その場で先生のお指図を受けて、『覚書』を書いた。明日先生から秋山様にお渡しくださること。

（突然の問い合わせのようにみえるがずっと前から根回しがあったに違いない。いよいよ幕府も動きだしたかと師弟はワクワクしただろう）

2/22

先生の所へ伺って、測器のこと御相談、帰りに弥五郎（測器製造者）宅へ立ち寄って、前に注文ずみの中象限儀と方位盤を急がせ、夜帰宅してみると、今日一時ごろ御船手組の露木様が留守中お見えになり、測器船積みの相談に來たのだが、明日朝また來るとしてお帰りになつた由。

（全体の荷物を軽くするため、以前から新しく軽い測器を注文してあった。御船手組が來たことは、すぐに師に伝えられたと思う。さあ大変。船に乗せられてしまつては、地表の正確な距離が測れないではないか。何のために、遠路蝦夷地まで行くのか分からなくなる）

外に三個でいいだろう、とおっしゃってお帰り。

先生宅へ伺つてみると、先生は昨日大手様へお出で下さり、御用人へ「海上よりの測量と申し上げた覚えはなく是非陸行測量をさせたい」と言われた所、御用人は「勘解由は百姓身分なので、陸地の通行証文を与えた例もなく、測器は好きなだけ持つて行けるから船の方が良いと評議されたのだ」とのお答え。先生、「船に乗っていたのでは陸地の測量は出来ません。ことに勘解由は、船が苦手です。ぜひ陸地を測量させるようお願いします」とお頼み。「では書付けにしてお出しなさい」と御用人。そこで先生は『申立書』をお書きになって今朝大手様宛てにお出しになったとのこと。

(ここで「大手様」といっているのは、若年寄・堀田撰津守正敦のことである。彼は大手門のすぐ外に住んでいたから、そう呼ばれていた)

秋山様（奥御祐筆）へ「蝦夷地御用の件のびのびになつておりますが、若年寄様へ伺つてみてください。勘解由は今度の御用のため測器を新調、近々出来上がり、七〇両ほどもかかっています」と申上げられた由。すると若年寄様「それは早まつたことをしたものだ」と秋山様に仰せられた由で、「御船手組の方もお見えになつたので、いよいよ御用仰付けと思ひ、今持つてある測器ではあまり嵩高いので新調に取り掛かつたのです」とおっしゃってくださったとのこと。

(幕府は前年蝦夷地を一部直轄にすることを決め、御書院番頭（役高四千石）松平信濃守忠明、勘定奉行（役高三千石）石川左近将監忠房、御目付（役高千石）羽太庄左衛門等を出向させて、蝦夷地御用係を新しく編成した。彼等のもとで蝦夷測量が行われる事になつて�다。ここで「若年寄様」と言つてゐるのも堀田正敦のことである。この年、若年寄は四人いたが彼の年譜によれば、「寛政の改曆」の功により將軍から「八丈織、五反」を拝領し、天文方の係りだったからである。

忠敬、高級官僚たちに怖じず

3 / 26

天文測器だけ船に載せ、三、四か所で陸揚げして天測し、方位測器は持つて歩いて測つて行けば、人足も大部節約出来る」と申したところ、桑原氏は、その旨高橋氏へすぐ伝えるようにと言われた。帰つて先生に一書認めてお届けした。

(一か月もなんのご沙汰もないで、陸行では幕府の気に入らず、計画は中止になつてしまふのではなかろうか。師弟はいろいろして待つた。いよいよ、桑原隆朝氏の登場である)

(幕府もまつたくむしのいいことを言うものだ。つまり、陸行したいのなら人足費は自分でまかなえということになる)

3／晦日 昼過ぎ羽太様へ伺うと蝦夷行きの新造船御見分のため御不在。四時ごろお夜食いただいてお待ちしていると、六時ごろ

御帰宅。「ながく待たせてさぞ退屈、氣の毒なことをした」とおっしゃって、敷居を隔てて御対面くださった。そして

「蝦夷地は予想以上の大国で、日本の津軽から長崎くらいまであるそだから、一、二年春夏ばかりの測量ではとても測りきれない。そなたの優秀な名主としての経験を生かし、蝦夷地へ住込み、蝦夷人を教育し田畠を開かせてみて貰いたい。

これは蝦夷係一同の頼みなのだ」とおっしゃったので、「有難いお言葉ですが、御覧のようにあまり頑丈ではなく、また蝦夷地については何も知りませんので、今年から出掛けてみて、北極高度、方位など測り、あちらの様子を見届けてから考えたいと思います」とお答えした。「至極尤ものことだ」と認めてくださいました。

測器の一覧表をお目にかけると、又「船ではだめか」と言われたので、「天測の器具は船で先に蝦夷地へ運んでおき、陸地の街道は方位盤と長持ちだけ持つて方位・距離だけを測り、帰りは天測道具を引取つて三陸海岸を測つて帰れば、街道どちがい人手も調達しやすいでしょう。将来は常陸から房州も測れば、御府内から蝦夷地までの海陸あわせた地図が出来るのです」と申上げた。羽太様は「では近々行われる松平信濃守様宅での会合に出席して貰いたい」と言われた。帰りに先生宅に寄り、御報告。

(羽太氏は蝦夷地は津軽から長崎くらいあると思つており、日本国的一部と認識していないように読める。忠敬はえらい人の前でも、物怖じすることなく、堂々として自説を曲げない。幕府はお金をけちつているのだから、自分で出す積もりなので何も怖いことはないのだ)

4／5 昨日羽太様から、松平様の御屋敷での寄合いに伊能をよこすよう、高橋先生に呼出状が来た。

史料 二 A三一 羽太庄左衛門呼出状（世田谷伊能家文書）

伊能勘解由事、来ル

七日四時、松平信濃守宅

寄合へ、御差出可有之候。以上

四月四日（寛政十二年）

高橋作左衛門殿

羽太庄左衛門

(さあ、又これからが大変である。役高千石の羽太氏なら一人で出掛けているのに、四千石の御書院番頭・松平忠明宅となると百姓身分の伊能には武士の付き添いが要るらしい。師至時はわざわざそのためには登城し、御徒目付・細見様に相談し、自分の部下の門倉隼人を付き添わせることにした。七日、八丁堀中の橋で二人は待ち合わせる)

4／7 隼人殿と共に松平家へ出頭。お玄関で御徒目付・細見様を呼び出し、隼人殿口上を演じて、すぐ御帰りになつた。
(多分、「佐原村百姓伊能勘解由、参上いたさせました」とかなんとか言つたのだろう。それですぐ帰つてしまふなんて、その形式主義がお

もしろい。例によって長く待たされ、夕食をご馳走になった。そして奥の間に案内され、御徒目付・細見さんが付添つたうえで敷居をへだてて、四千石と三千石と千石の三人の高級官僚に対面を許されたわけである。まるで映画を見るような場面が続くので、桑原隆朝には直接関係ないのだが、引用させていただく）

同日　松平信濃守様が、また「なぜ船ではだめなのか」とおっしゃったので「海上測量は不得手、長い船の旅では難渋いたします」と申上げると、信濃守さま「今後の御船通行のために、

去年堀田仁助に海上測量を申し付けた所、帰りはやはり陸地を帰ってきた。不埒なことである。陸地ではなかなか海路のことは分かるまい」との仰せなので、「蝦夷地から奥州、常陸、上総、下総、房州から江戸までの連続した北極高度と方位、距離が分かれれば、眞の日本の形、ひいては海路も分かるのです」とお答えした。

（蝦夷地御用係トップとのこのやり取りを、じっくり読んでみると幕府はいったん事ある時には、武器や兵士を船で運ぶ積もりであり、安

全で最短の海路と、蝦夷地の地形だけが知りたかったのだという事が分かる。新造船「政徳丸」まで作っている。しかし海路を知るために正しい陸地の形状が必要なことを、信濃守はやっと納得したらしい。そして彼は、人足があまりにも大勢必要になるとツツツツ言つたあげく、次のように言うのだ）

同日　「蝦夷地で越年でもするならともかく、来月出立九月帰府で満足な測量は絶対に出来ぬ。私はかたく請合ってもよい。

無限の天に詳しい身なのに、けし粒ほどの蝦夷地には暗いの

だな」とお笑いなさったので、「天は至大ではあります、が、日、月、五星、恒星などは日夜見えます。蝦夷地は極小ですが、目に見えないので測れないのです」とお答えした。

御勘定奉行石川将監様は、何もおっしゃらずに書きものをなさっておいでだったが、私の方をお向きになつて、「そなたは天文に詳しい人物とのみ思つていたが、代々の家柄で、自分の村のみならず他の村にまで仁情の由。そのような者を蝦夷地へ遣わして、測量不成功に終わらせたくはないから、来春に延ばした方が良いと私は思ったのだ」とおっしゃった。ご親切なこの御一言、身に染みてありがたく思つた。

先年堀田仁助の作った絵図ともう一種類、二枚を貸してください、御前をさがつて高橋先生宅へ回りご報告した。

（四千石の御書院番頭に笑われて、きちんと反論していく立派である。だが、まだ交渉はペンドティングである。ずっと付き添つていた御徒目付の細見さんは蝦夷地にくわしいらしく、忠敬は帰りがけに「波が荒く天測器具を船で継送するのは難しいぞ」と言われている）

4／8　次のような『説明書』を書いて、これにお借りした地図を添えて靈巖島にある蝦夷会所へ持参した。

『一、お借りした地図は測量されていない所もあり、地図は連続して測量されていないと意味がありません。

一、昨日のお話では波荒く継送は難しい由、私出発前に重い天測器を松前に船で送つておいてさえくだされば、蝦夷地での人足は私が雇います。

一、帰りは奥州でも北極星の高度など測りたいので、重い測器の分の人足賃も私が支払います。したがつて道中測量に差

支えないよう、お声掛け（先触れ）だけはお願ひします」

（言いたい所だけ抄録しているので、ずいぶん威張っているように読めるが、「恐れ入り奉ります、もしお許しが頂ければ」という調子である。本音は、自費で雇うと言えばいいんでしようということ）

4/18

高橋先生からお手紙。「十五日登城、羽太氏にお会いした所、『船で天測器を運べば万一延着の恐れもあるから、自費でなら初めから持つていった方がいいかも知れぬ』と言われました。この間の上申書は大変有効でしたね。また松平信濃守様宅で寄り合いがある由、麻上下ご用意の上お待ちください。また隼人の付き添いが要るのかどうか？」とあった。

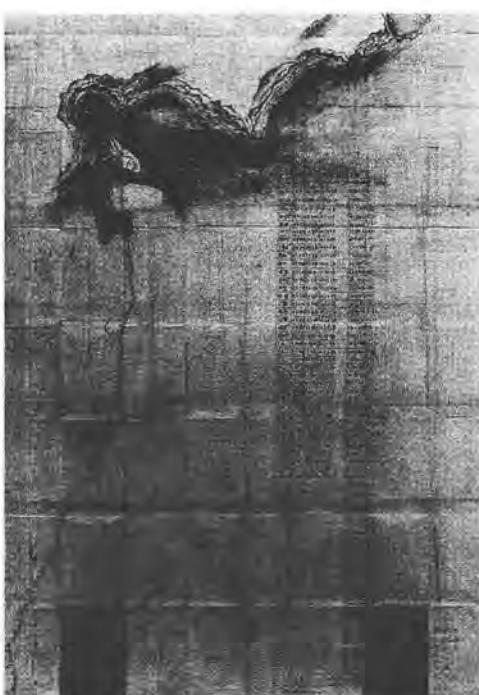
（幕府の本音も、はっきりしてきた）

4/22

体調が悪かったが、信濃守様宅へ参上。えらい方々の面接はなかつたが、細見様外お立ち会い、「『道中人馬触れの御証文』は出しにくい。御上の御下賜金少額でも、今度の御用お受けする気があるか」とお尋ねに付き、「道中滞りなく御触れさえ下されば、自分で費用で勤めます」と申し上げた。帰りに先生にご報告。一日中雨、病中大変だった。

（やはり、お金がすべてを解決したのだ。『御添触』（これは人馬賃が有料）でもいいから、出してくれば費用は自分で払い、しかも新しい測器も船送りは止め最初から持つて行く、という新しい『願書』を出してやっと一件落着した。公費は一日たつた銀七匁五分、費用は測器の分は別として、百両近くにものぼった）

知人も親戚も多く、あちこちに逗留して地図を作りたいと願つていましたが、願いのかなう道が開けました」と書いた。（領主にも説明し、やっと安心して報告のため桑原宅へ出向いた忠敬は、右の領主宛報告書にもあるように、実は奥州から常陸・上・下総・房州・御府内までの海岸線を、引き続き測量したいのだがと打ち明けた。桑原に「書類にして持つておいで下さい。御内覧に入れる機会もあるでしよう。口上ではなかなか通じかねるもので」と言われ、早々と第二次目の願書を彼に託した。内覧したのは、もちろん若年寄堀田正敦氏であろう。最初の旅立ち前から、伊能忠敬はすでに第二次の構想を持っていたのである）
（この項つづく）



渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』より

参考文献

閏4／5 佐原村領主・津田氏へも報告書を出した。「私は上総生まで下総に養子に参り、米取り引きの関係で常陸・房総には

『伊能忠敬測量日記』

A 三一

千葉県史料・近代篇

伊能家文書紹介十・その二

山川湊の風

伊能 陽子

初めて訪れた薩摩のくに、鹿児島は、どこにもかしこにも「歴史」が息づいていて、それを伝えて来た人達の暖かさが感じられた。太陽に育まれた人情の、おおらかさであろうか。

手元にある鹿児島関係の書き付けを、とにかく読んでみようと決心したもの、増村宏著「伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説」及び「鹿児島県史料集（X）伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説」に、多くの資料と研究が掲載されており、読むほどに私など出る幕ではないと落ち込むばかりだったが、とりあえずこれらの文書を手掛かりに、二百年前を覗いて見ることにした。

前号苗代川文書の差出人松元十郎兵衛と、同じく薩摩藩測量隊付添い役、野元嘉三次の手紙である。九州の測量は、第一次の文化六年八月江戸出立から、第二次の十一年五月帰着までの約五年間とその前後であるから、ご兩人と忠敬とは長いお付き合いであった。

例によつて、測量前に地元資料を整えて提出せねばならず、受け入れの指図をするためには、測量隊の動きを正確にキャッチして必要な事柄をしつかり把握しなければならない。勿論、大変な費用がかかる事だから、国元の意向も十分に心得、緊密に連絡を取らねばならない。担当者としては、気苦労の多い年月であったろう。そのような様子が、次の書状からくみ取れないだろうか。

一筆致啓上候 追日
冷氣相増候得共 各様
弥御堅勝 被成御廻勤
乍御大儀 珍重奉存候

然は 去月十四日 於江府二
牧野備前守様より 此方
留守居 御呼出ニテ 領内
種子嶋并屋久嶋へ 来未

三四月頃 六七月頃ニ無之候ては

往來難相成由ニ付 一先

他国御廻勤有之 時候

右嶋々へ 御越被成候間

其心得ニテ 御差支無之様

御見合 中途より御立戻

御渡海の儀 取計可申旨

被 仰渡候付 即 主人より

御請被申上候 依之

別紙ケ条書を以 此方

手当心得の趣 御尋申越候間

乍御面勵 逸々 以御附札

御答承知仕度 奉存候

此段 態と 飛脚を以 得

貴意候 恐惶謹言

御座候得共 各様弥御堅勝

被成御廻勤 乍御大儀

伊能勘解由様
坂部貞兵衛様

珍重奉存候 然ハ去十月

以飛札 御掛合申上候通

当領内 種子島并屋久島へ

当春より夏末ニかけ

御往返可有之旨 於江府

牧野備前守様より 御達

御差入可被成哉 於其儀ハ

何国より御引返 且 御立戻の

御人数 又ハ 御入用の人馬

或ハ 御宿り駅等の儀 別紙

箇条書を以 御尋申上訴候處

其節の御返書ニ 未 月数も

有之 何国より御引返ニ

可相成 程合も不相知 且

領内へ御差入の節 殊ニ寄リ

御手分ニテ 大口通も御通行

可被成哉 御帰路の節

紙屋口へも 御出抜可有之哉

右ニ付ては 当領内ニ不限

日州街道御通行の御手配も

御座候間 猶 追々御取しらへ

史料 二
B二〇六

一筆致啓上候 未余寒強

『 (前略)

さて、去月十四日、江戸におきまして、牧野備前守様より当方の留居役にお呼び出しがあり、領内の種子島、屋久島へ来年三四月頃、六七月頃でなくして往来が難しいので、ひとまず他国をお回りになり時候を見計らってお戻りになつて、右の島々へお越しになられるとの予定で、差し支えないように渡海の準備をするよう、ご命令がありましたので、主人はお受け致しました。ということで、別紙箇条書きにより当方のなすべき事などお尋ね致ましたが、ご面倒でございましょうが、一つ一つ札を付けてお答えを頂きたいと存じます。この事、特に飛脚使でご意向を伺いたくお願い申し上げます。

(後略)

』

(世田谷伊能家文書)

宿次を以 御細答 可被仰聞候間
其節迄 徒是相伺候ケ条書

御頬被置候段 貴報の趣

具承知仕 其以後 折角

御左右相待 罷在候得共

今以 否の御模様不相分候

然處 先達ても 微細ニ

得貴意候通 此節又候

御立戻ニ付 諸手當向

御小家方と違ヒ 聊の儀迎も

夫々受持の役場手數ニ

相渡ル儀ニ御座候得は 万端

差掛致承知候ては 事品ニより

御間ニ逢兼 不都合ニ成立候故

前廣 得と手当申渡度

御座候間 去冬進達仕置候

箇条書ニ 逸々以御付札

御細答 被仰聞 被下度 乍

御面勵 奉頼候 此段 以飛札

猶又 相伺度 如斯御座候

恐惶謹言

野元嘉三次
花押

正月十三日

伊能勘解由様
坂部貞兵衛様

追啓 余寒の砌 折角御自愛

御凌被成候様 奉存候 爪慮外

御同列の御方々へ 可然様御伝達

被下度 奉頼候 吳々も三月迄ハ

最早豫月も無之儀ニ 御座候間

当年御差入の有無 御治定の程

何卒 早致承知 安心仕度奉存候間

若 万一此節迄も 御取しらへ不相濟

表向貴答 難被仰聞 御訳合も

御座候ハハ 御内含の趣ニても極密

被仰聞被下度 厚奉頼候 以上

『 (前略)

さて、去る十月飛脚便で申し上げましたように、我が領内の種子島、屋久島へ、今年の春から夏末にかけて往復なさることを、江戸において、牧野備前守様からお達しがありました。

いよいよこの三月、当地へご入国になられますが、それにつきまして、どちらの国からお引き返しになり、そしてお戻りになる人数、またはご入用の人馬、或いはお泊まりの宿場のことを、別紙箇条書きによりお尋ね申し上げました。ところが、その時のお返事では、まだ先のことであり、どこから引き返すか予定もわからかねることのこと。

またご入国のとき、ことにより二つに分かれて大口通りもご通行になられるのか、お帰りのとき紙屋口へも通り抜けることがあるのでしょうか。このような事は我が領内だけでなく、日州街道ご通行のお手配もありますので、なお順次お調べのうえ宿継ぎにより、詳細なお返事

を頂きたく存じます。

それまでに、これからお尋ねする箇条書きにお頼まれしたこと、ご意向をもれなく承知致し、その後つとめてお指図をお待ちしておりますが、いまだにどのようなご様子か分かりません。

ところが先だつても詳細にご意向を伺つたように、今またお立ち戻りについての諸費用のこと、小家の方々とは違いますので、少々のことでも、それぞれ受け持ちの役目手数にかかわつてまいります。すべて差し当たりは心得いても、事柄によつては間に合わず、不都合なことにもなりますので、まえもつてしまつかりと準備をさせたいと思ひます。

去る冬に差し上げてあります箇条書きに一つ一つ札をつけて、詳しいお答えを頂きたいとご面倒ながらお願ひ致します。急ぎの手紙により、此の件重ねてお伺い致します。

(中略)

くれぐれも、三月まではもういくらも御座いません。今年お出でになるのかどうか、お決まりのことをどうぞ早く承知して安心したいと存じます。もし万一、この度もお調べが済まず、表向きのお答えが頂けないご都合でも御座いましたら、内々のおつもりでも極秘にお知らせ下さるよう、是非お頼み致します。

』

正月十三日

松元十郎兵衛
野元嘉三次

史料 三 B二〇八

(世田谷伊能家文書)

罷在儀ニ御座候 依之
右繪図面 急速ニ致進達
通融難叶 不及是非
最早旬季相後レ 飛船込も
明決難仕所も 有之候得共
七嶋の者共へ 不相糾候ては
細密に相記候ニ付ては 何連
役人共へ 具申聞 早速
しらへ方ニ取付候処 往古より
有之候繪図面の内 少々宛
不行届儀も御座候付
候儀 相調兼候間 今暫
御猶予 被成下度奉存候
此段 牟序 得貴意置候
以上

伊能勘解由様

以別紙致啓上候 然は

当領内 於長嶋ニ七島

絵図の儀ニ付 私共両人へ

委曲被仰聞候趣 城下へ

追啓 寿右衛門事 先達て
致改名候付 此段も得御意候

「別紙にて差し上げます。さて、当領内の長嶋で七島の絵図について、私共兩人へ詳しい事情をお聞きになられましたが、城下へ戻りまして係の役人たちに詳しく問い合わせ、早速調べさせました所、従来の絵図面のうち、少々だけ不備なところもありました。詳しく記すためには七嶋の者たちへ問い合わせなければ、はつきりしない所もありますが、もはや季節がはずれ、飛船も融通できず、仕方がありませんので今年の船が通る時期を待っている次第で御座います。

このようなわけで、右の絵図面を急いで差し上げることができません。今しばらくご猶予下さいますように、よろしくお願ひ申し上げます。

(中略)

追伸 寿右衛門は先だって改名致しましたので、これもお知らせ申し上げます。

』

どの書状も、月日しか載っていないので文中の「来未」とか「当三月」とかで、一応順を追つたつもりだが、だんだんに差し迫つてくる種子島・屋久島の測量についての質問状に、忠敬からはっきりした返事が来なくて、ヤキモキしている様子が行間から滲み出ている。それにしても、寿右衛門さんは何と改名したのだろう。

薩摩藩、種子島とも財政困難な中、大規模な測量協力を得てその測量を終えた忠敬は、全国実測が終結に近づいたことを娘妙薰宛の手紙の中で「諸侯大名のお取り成しのおかげ」と感謝しているが、いつでも、どこでも一番苦労したのは、実際に動き回った人々であった。それらを含めての「天命、先祖よりのご礼徳」への感謝と思いたい。

余談になるが、鹿児島を訪れたもう一つの目的は、母 多嘉子の曾

祖父にあたる島津藩の学者、伊地知季安の墓参であった。母の果たせなかつた念願を、黎明館の方々のお骨折りで実現できることは、嬉しかつた。地元の方には、「伊能忠敬」と「伊地知季安」がなかなか結び付かなかつたようだが、無理もないこと、二百年後の鹿児島の伊地知家と千葉の伊能家の縁組など、思いもよらぬことである。

そして、もう一つ繋がつていた糸は、忠敬の墓碑文の作者であり、孫忠誨の師であつた佐藤一斎である。季安は天保十一年に桂庵禅師の碑銘を一斎に請い、しばしば書をおくり厚く謝意を表したことが、記録に残つてゐる。



第一次九州測量中の文化七年七月に、鹿児島の山川湊で海を見ていた六五才の忠敬。その湊から、島津重豪の逆鱗に触れた季安たちは、嘉界島へ流されていった。季安二八才、文化六年のことである。そして、赦されて鹿児島の自宅へ帰つたのが文化九年であった。

ほとんど時を同じくして、山川湊の風を、それそれどのような思いで受けていたのだろうか。江戸時代の薩摩、現在の鹿児島、私にとつて、どちらも魅力に溢れている。

忠敬さんは歩測が嫌い

（一）

女めあかし 永野 達代

前号はゾーツとしたところで終ったが時間が経って落ち着いてくると、その間の苦労話をして仕様がないので、結果だけ付録としてこの稿の最後でご覧頂くことにする（二七頁図3）。

続けて大チヨンボの解明に挑む

さて再び忠敬さんの行動を追ってみるとしよう。

第一日目は隠宅から司天台までの歩測をし、自宅へ戻り作図をして、二点間の直線距離を書きいれる。つまり往路と司天台、隠宅間の直線、それにそれぞれの距離を書き入れた図をつくる。

第二日目はそれを懐に再度歩測をしながら司天台へ行く。この日測った距離が改である。

前号に書いた“往路の最小単位が間であるのも納得できるような気がする”ということに対し、数人の方からあれはどういうことであるのかと質問を頂いた。

これが大チヨンボの最たるところなのでわざと書かないでおいた。

山場を後半にもつてくるという高度なテクニックを使ったのである。私の頭には或る仮説があった。それを裏付けるものが佐原村歩測図にかれていることを伊能陽子さんから電話で伺い、研究会総会の折に実地調査をしてみたいという気持ちもあって、コピーを送って頂いた。江戸歩測図に先行する図である。

これが又面白い。内容を発表してしまうと、忠敬ファンに首をしめられそなうので、一人で楽しむことにする。

二箇所“津田様御定杭”と記されているので、領主津田山城守との関係が示唆されなくもない。

さて、その佐原村歩測図は案の定、堤や農道とおぼしき場所を測量しており、数カ所ではあるが○間半という記述がある。細い田圃道なので半間が最小単位である。間単位では行き過ぎてしまうのである。それに比べて江戸の街路は広い。普通の道で京間五間から六間というから約九・九mから十一・八m。正確な資料はどこかに仕舞込んで見つからないが、奥州街道の司天台の前の御米蔵の火除地を兼ねた広小路は、たしか二五m位だったと思う。

忠敬さんは気持ちがよかったですに相違ない。さすがはお江戸だ。三歩どころか六歩行こうが七歩行こうが、田圃に片足つっこんだりはしない。自分の三歩一間に都合をあわせて曲ればよいのである。

これがご質問の往路の最小単位は間で納得の答えである。

しかしこうして忠敬さんの側にたって考えてみると、どこのどなたさんが言っておいでか知らないが、大チヨンボ等とんでもない。一間単位ということは、実に合理的で自然なことなのである。

推歩先生

忠敬さんは推歩先生とあだ名されていたという。

つけられた理由ははつきりしないらしいので、私自身かなり気に入っている取って置きの想像をご披露する。

推歩とは廣辞苑をひくと“天体の運行を推測すること”とある。

私はこれを地上におろしてみる。

あろうことかあるまいことか、一間単位の地図を、我等が忠敬さんは、当代屈指の天文学者達に提出してしまったのである。

嗚呼 やんぬるかな

自分の歩幅に都合をあわせて作った地図をみせて、「これこそがまさに推歩だ」と彼らにわんわん喜ばれてしまった。そして挙げ句は師至時に“推歩先生”とやられてしまうのである。

あるいはいつまでも上達しないので、後になつて言われるか。

測量家伊能忠敬への第一歩

しかしこの日、忠敬さんは初めて測量の手ほどきを受けることになる。そのことは前号二八頁上段の表、往路と復路の性質の違いがあらわしている。往路はみてきたとうり忠敬さんの自己流である。

目標物を設定すること、もつと細かく測ること、そしておそらく道路のどこを測るかも習ったであろう。しかしまだ、あまりうるさいことは言われていないようである。せめて一步単位でというところか。

司天台を出たところの“百三十八間”これが測量家伊能忠敬への第一歩なのである。

この歩測図は距離、地形をあらわしているだけではなく、ここからは忠敬さんの一日という時間と、アマチュアからプロへの変身の瞬間のドラマをも読み取れるのである。

ここを書きたいがために行動経路や往路復路をくどく言つたのである。渡辺忠敬さんごめんなさいでした。

復路、忠敬さんはさつそく先程の師の教えを実行にうつす。はじめてのプロのやりかたなのだから、緊張と喜びでいっぱいだったであろう。最初の目標物木戸までは丑五分五厘の方向へ百三十八間。次の目標物泥鮪汁までは丑五分五厘の方向へ百九十六間六六。ちゃんと二歩で止まつている。よろしい。屋号ではなくて泥鮪汁と記しているのがおかしい。

どういう料理なのだろう。忠敬さんの好物なのか。墨で黒々と泥鮪汁と書いてある障子が目にうかぶ。突然ですが江戸時代の勤め人は、お昼ご飯はどうしていたのでしょうか。どなたかお教えください。

次の目標物は駒形堂。推古天皇三六年(六二八年)漁師の松前浜成、武成兄弟が、観音像を拾い上げたのがこのあたりである。

君はいま駒形あたりほととぎす

高尾大夫の心を乱した悪いやつは、お信さんの父桑原隆朝が仕える仙台藩の伊達侯である。

駒形堂は勿論のこと、忠敬さんが歩いているこの奥州街道の様子や霧雨氣は、西側の閻魔堂、正覚寺、諏訪明神あるいは木戸などと共に、年代はすこし下がるが、江戸名所図絵その他から知ることができる。

浅草寺に入り風雷神門、仁王門、觀音堂、隨身門を目標にして歩測を続ける。

隨身門(今は二天門)は、やはり元和四年(一六一八年)の建立であるから、我々は今、忠敬さんと同じ門をくぐができるのである。前出の桧前兄弟と、彼らと共に浅草觀音をおまつりした土師中知の三人が三社権現の祭神である。この三人の子孫達はその後明治まで、代々觀音様にお仕えしていたと言うのだから壮大な話である。さて忠敬さんはと見れば大川橋(吾妻橋)もちゃんと測っている。

この橋は安永三年(一七七四年)の架橋である。両国橋が万治二年(一六六〇年)の完成であるから案外新しく、忠敬さんが測った時はまだ二年しか経っていない。橋の袂に番小屋があり、渡り賃は二文。ちなみに新大橋完成をよろこぶ芭蕉の一句

ありがたや いただいて踏む橋の霜

前号で、なぜ多田の薬師堂を歩測しているのかわからないと書いたが、大川橋東詰五間三分のところから南への道は、なんらかの外的要

因により歩測不可能だったので、「此間不分明前後にて記」の記述となり、多田の薬師堂から新たにやり直しているのである。

一度切れているのであるから、作図は当然図1のa地点から北へむかっておこなった。ここでり説はいさぎよく引っ込めることにすると、やはり図1のbc間の行動は不審である。

大きな声では言えないこと

読者ゼロという事態になることを恐れて、センセーション的な題をつけてしまった。まんまと引っ掛かって、今ここを読んで下さっている方に謝謝。しかしこの題がまったく見当外れという訳ではない。

重複して歩いている道が数カ所あるのに再測していないし、前の図に描きたさないで、往路の平均値をだすか或は第二日目の歩測成果だけ、別の紙に書き直さなければいけない。

何等かの志を抱いての出府や、資料から察せられる、厳格な人間性や仕事ぶりと言う先入観が邪魔をしているのだろうが、それにしても熱心とは言い難い。先に緊張と喜びでいっぱいだろうと想像して書いたが、やはりイヤイヤやっているような印象である。

大谷亮吉氏は著書「伊能忠敬」で「この図に記せる距離は凡て歩数により極めて粗雑に測りたるものゝ如く何れも皆実際距離より著しく短縮せるを以て眞距離の明らかな部分より推究してこれを改算せり」とバッサリやっておられる。

この大谷氏の文は次の章に入れたほうが適切だったかもしれない。

忠敬さんはバリバリの実業家として生きてきた人である。

フィールドワークのやり方がわからないというか、感覚のようなものがわからなかつたのではないだろうか。

誤差の原因の追及

どうしても心にひつかることが二つある。

一つは私は短い距離はあるが一箇所リラックスしながら歩測をして、誤差はどちらも二%に近い一%台であった。その体験があるので、十数%もの誤差はとても考えられないものである。

もう一つは歩幅である。一間を三歩で歩いたとすると一步六〇・六センチとなる。私の歩幅は六七・五センチ。身長は十センチかもう少し忠敬さんより高そうだが、それでも男性の忠敬さんが、七センチも歩幅が小さいとは、どうしても思えないものである。

では忠敬さんの歩幅が六〇・六センチより大きいとする、意識的に歩幅を縮めて、一間を保ちながら歩いたことになる。しかし往路にみるよう、第二日目の歩測である改は、軒並み数字が減っている。ということは歩幅がひろがっていることを表すわけで、意識的に歩幅を縮めているのならば、そのことに気付く筈である。

やはり自然体で歩いたとみるべきであろう。

図3をご覧頂きたい。私の復元図との比較のために、忠敬さんの歩測図は司天台を軸に時計方向へ少しずらしてあるのだが、それは一二三・二%に拡大すると、復元図とかなり相似形に近い形になる。自分でも雑駁な印象と書いているのに、憎たらしくもわざわざ大谷氏の言葉を引用すれば、極めて粗雑ではこのように形体は整わない。極めて粗雑なのではなく小さい（短い）のである。

これは歩測図の全ての距離に、同じ率の誤差があるということである。その誤差の正体は何か。そこで女めあかし渾身の推理の登場である。前号二八頁下段、佐久間さんがだされた歩幅からの計算、二五・三二センチ。これを私は忠敬さんの足のサイズとみる。

第一回会合の時、富岡八幡宮で各自の歩幅を調べた。私はスタートラインに爪先を付けた。世話役が踵からですという。爪先じゃないんですか。踵です。踵からスタートの経験などないのだから、納得しないまま歩きだした。今思えばあの時の生真面目風オニイさんは新沢さん。江戸博広場での歩測大会のお世話のとき、同じことをする方は結構見かけた。忠敬さんもこれをやってしまったのではないか。

畠のへりに爪先をつけて一、二、三歩で反対側のへりに踵をつける。これが忠敬さんの歩幅にぴったり合つたのである。なんという好都合。なんという悲劇。最初の一歩をへりの外に置いたがために、忠敬さんは一間プラス自分の文数を、一間と思い込んで測り続けるのである。かわいそうな忠敬さん。

しかし、その後の忠敬さんの腕の上達ぶりは、凄まじいばかりである。どんな世界でもだいたい十年が一通りの仕事を覚える目安であろう。

もちろん師至時の強力なバックアップがあつてのことであろうが、忠敬さんは五年で第一次測量に出発してしまうのである。

ほとんど自費といつても幕府の許可、協力を不可欠とする重大な仕事である。同行者は内弟子と従者だけで教えを乞うる師はない。

忠敬さんはなんと五年で実戦に使える知識、技術を習得したのである。

* * *

先日、明治七年模写の伊能中図を、はじめてルーペで覗いた。描手たちの仕事には凜とした姿勢と緊張感が張りつめられていた。時を越えて彼らも伊能プロジェクトのメンバーなのである。

伊能図を滔滔たる大利根の流れに擬するならば、この歩測図にはまさに源流の最初の一滴がしたたり落ちる様がえがかれているのである。そして沢山の支流を抱き込みながら大河となつてゆく。名を残すことのなかつた大勢の人達にも心をはせながら、扉を閉めることにする。

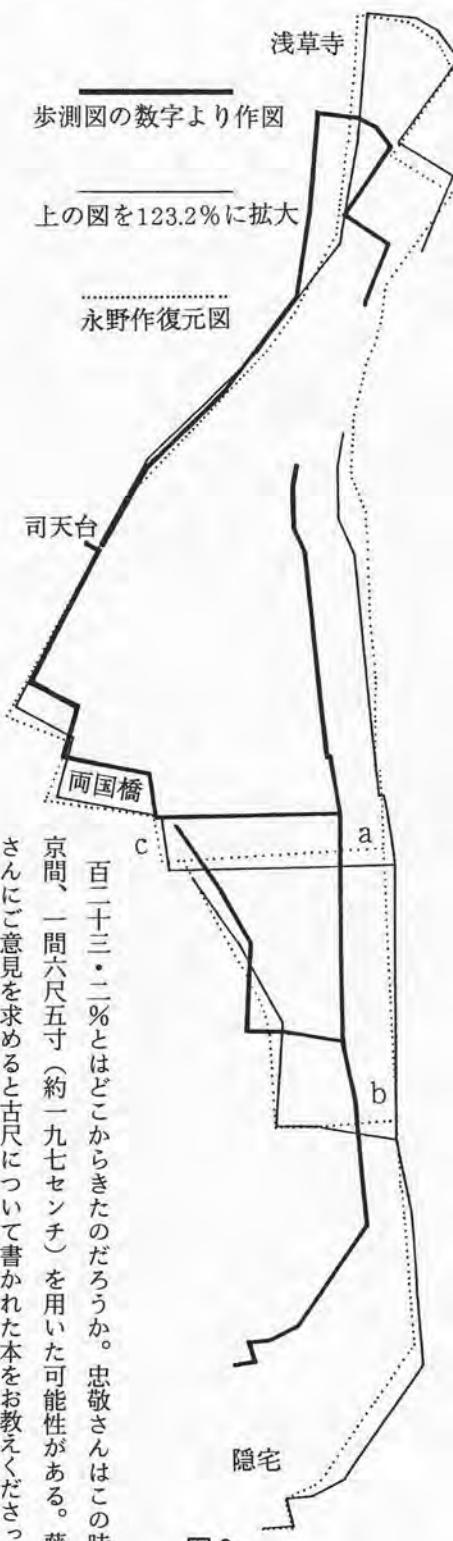


図3

百二十三・二%とはどこからきたのだろうか。忠敬さんはこの時は京間、一間六尺五寸（約一九七センチ）を用いた可能性がある。藤岡さんにご意見を求めるところに古尺について書かれた本をお教えください。このころの江戸での江戸間、京間の使われかたをお詳しい方、どうぞ御教示ください。もう脳がパンパン。はやく普通の人に戻りたい。

女めあかし様

大内 繁男

一度 一／三＝〇・三三 三分三
二度 二／三＝〇・六六 六分六

と記号化したのではないでしようか？

『伊能忠敬研究 第一六号』歩測図の謎ときに参加させてください。

お手数でしあうがお取り次ぎを宜しくお願ひします。

たのしく拝見しました。私見を記しましたので、読んで頂けましたなら幸いです。

図2から今様に見ますと、閉合方式の多角測量による地点の確定のようです。トラバース測量とか、骨格測量ともよばれ、目的は地形図を作成する前段の測量です。

机の上に糸をリング状態にしてください。このような測量の径路の接点を閉合点といいます。図1のc点です。ここでのズレが許容範囲以内にあれば測量はおわります。

しかし誤差があります。この誤差を最小限にするのが補正です。方位角と距離に修正計算がなされます。

改：測量値に補正された距離

六分六、三分三：方位角の補正量

のようです。

六分六、三分三について

全方位角三六〇度の読み取りは一支十等分一二×一〇＝一二〇分ですから最小メモリは 三六〇／一二〇＝三度／分 となります。

最小メモリの一分を三等分して

a—b—cの径路を、記載のデータを用いて一／一八〇で作図しました。結果はc点の補正後で閉合点は三七間のズレでした。再測です。

この測量が隠宅と司天台との位置関係の確定ならば、閉合点を隠宅にすべきです。

a—b—cの径路を、記載のデータを用いて一／一八〇で作図しました。結果はc点の補正後で閉合点は三七間のズレでした。再測です。

多角測量では往路復路の考えは見当たりません。出発点、到着点の一ルートです。

測歩について 地理院のOBに忠敬さんは一・八mだったようだと聞いて試したことがあります。測歩ならこのほうが合理的だと感じました。

測歩は一・五mを一步で測り一測歩と呼称し、水準測量に利用されます。

(おおうち しげお・マップモニター)

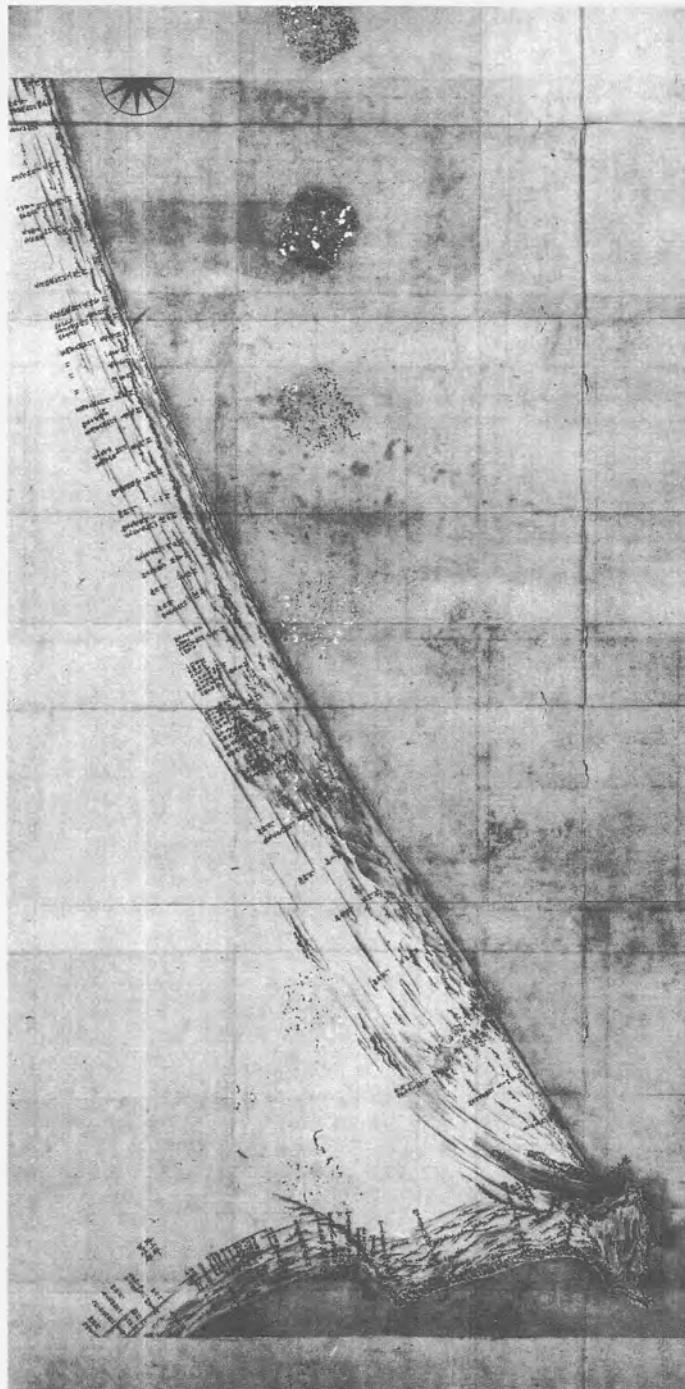


図5 自江戸至奥州沿海図第5 (自井戸野至滝浜)

犬吠崎周辺と鹿島灘沿岸である。測線は犬吠崎南側の断崖地区を避けて街道筋を
銚子に向かい、あと北側から海岸を廻り込んで測量可能部分だけを測っている。
測線以外は概略の地勢を絵画風につけ加える。

(180 × 89 cm)

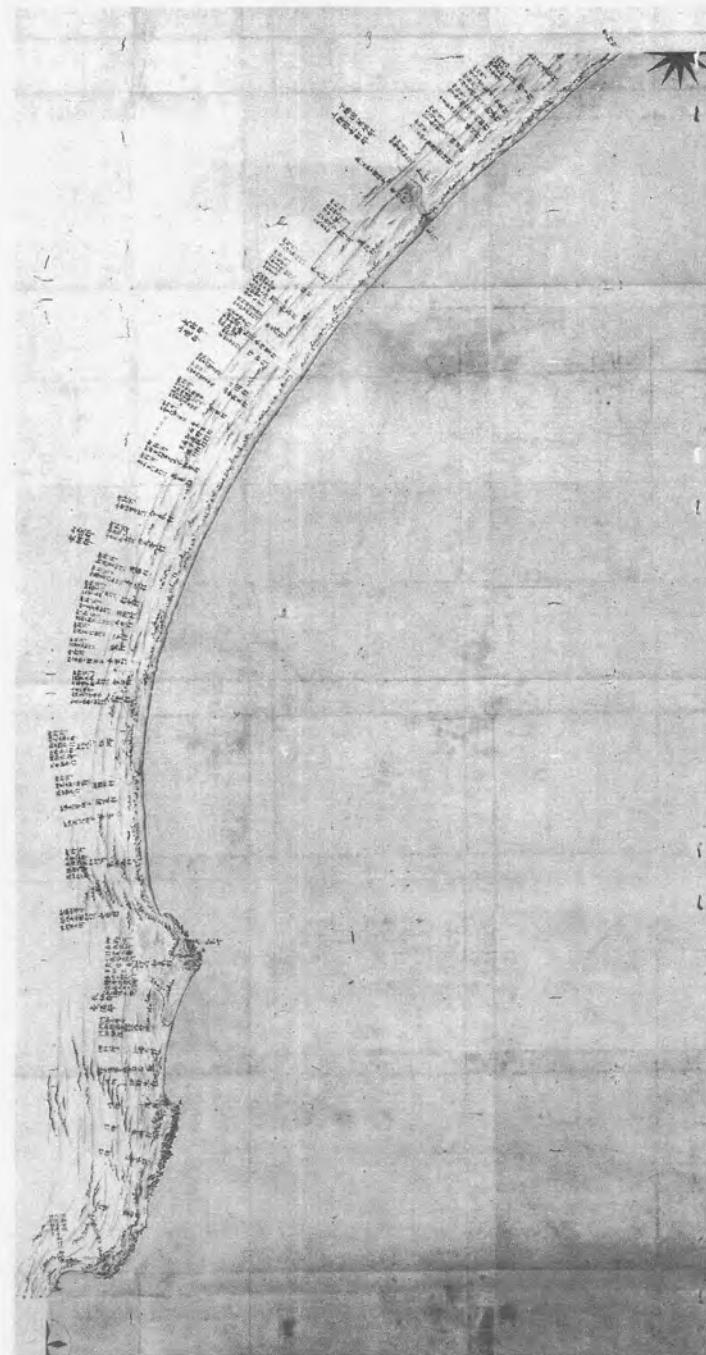


図4 自江戸至奥州沿海図第4 (自御宿至井戸野)

御宿から太東岬まで岩壁の海岸は内側の道路を測り、外側に絶壁の様子を絵画で描く。九十九里浜は砂浜の海岸を測線が走っている。途中に2ヶ所、測線の枝線が中里村（現在の横芝町）と屋形村（現在の白子町）に伸びて、天測がおこなわれている。横芝町の測量の際に父神保貞恒の墓参をおこなっている。

(169 × 88 cm)

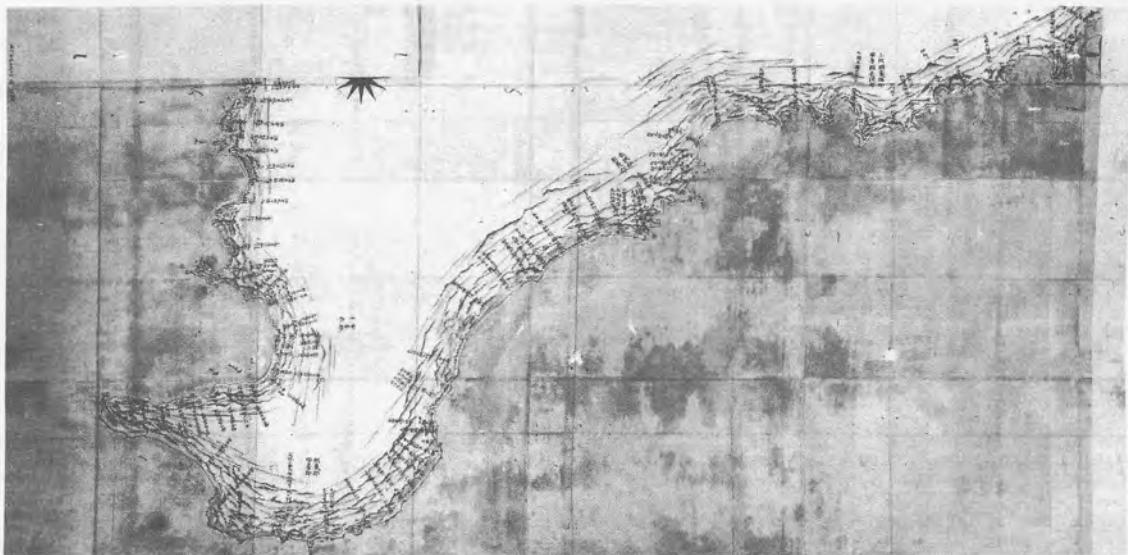


図2 自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第2（自田浦至片瀬 自大堀至吉浜）

東海道方面の第2図と房総沿岸の第2図が一緒になっている。測線は朱、砂浜を黄色、山景は緑である。富津岬の先端は測線ではなく、砂洲だけが描かれている。（74×160.5 cm）

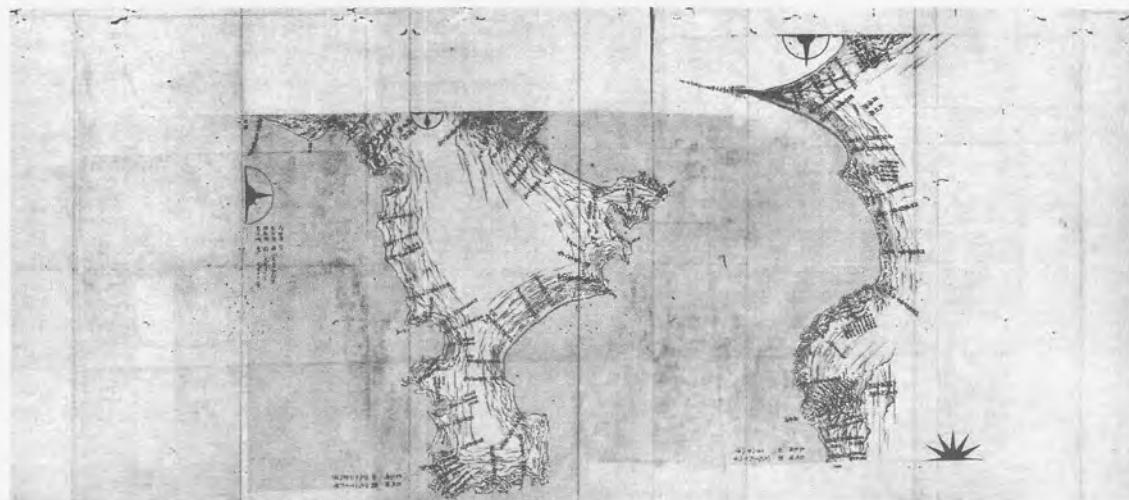


図3 自江戸至奥州沿海図第3（自吉浜至御宿）

房総半島の先頭部分である。海岸線の砂浜あるいは崖上を測線が走り、沿道の村々の名称、領主名と海岸から見た風景が描かれている。

(87×177.5 cm)

伊能図探求 第十五号

渡辺 一郎

文化元年上呈 伊能大図

表紙写真に掲げた文化元年（1804）提出の「日本東半部沿海地図・大図」の全69枚について逐次紹介したいと思う。原図の所蔵者は伊能忠敬記念館である。

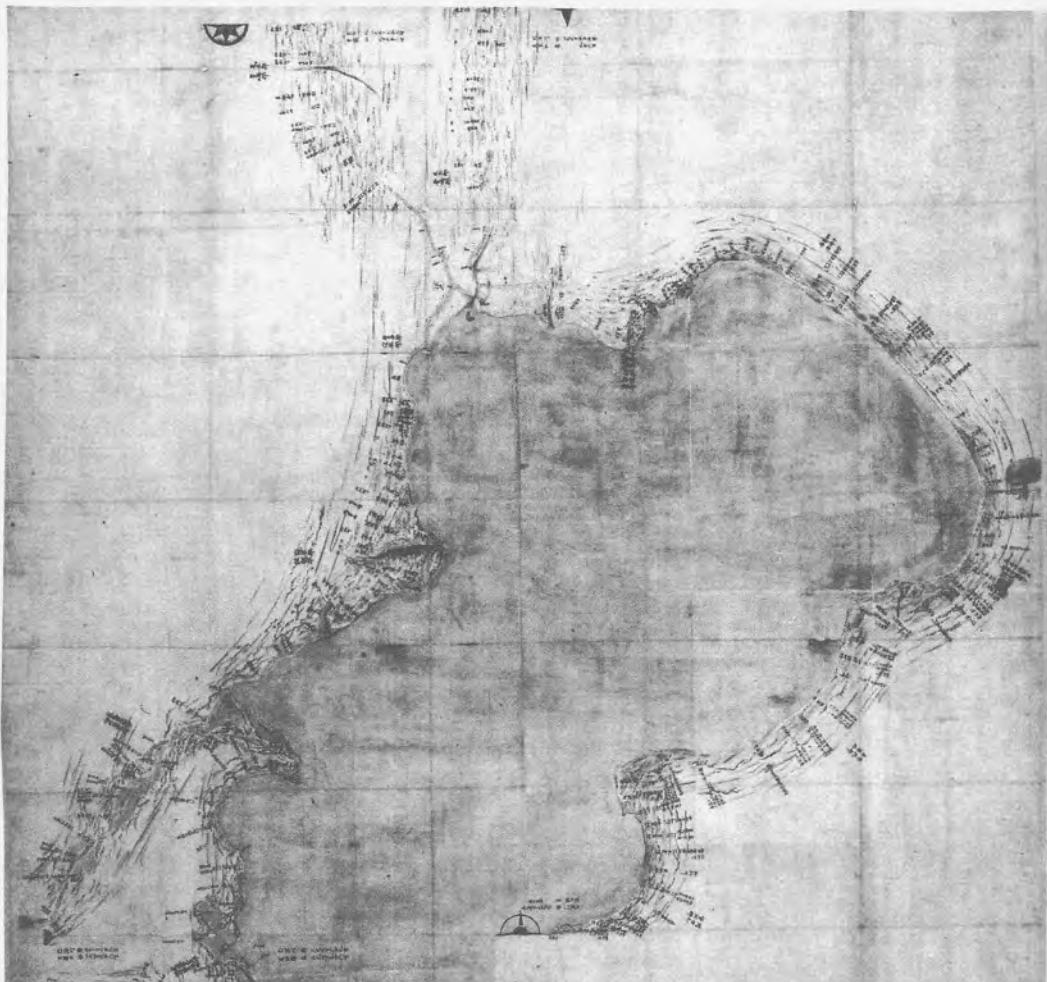


図1 沿海地図 初図（略称）

題巻の名称はつきのとおりである。

歴尾州赴北国到奥州沿海図第一自江戸至前沢田浦、奥州沿海図第一 自江戸至大堀、

奥州街道図第一 自江戸至草加、

越後街道図第一 自江戸至蕨

各方面別に作成した地図の第1図の江戸部分をまとめて描いた図である。展示頻度が多かったためか退色が激しい。

（縦175×横167cm）

ニュース速報

●伊能忠敬研究会・ホームページ
URLは <http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

●十一月十四日、福岡朝日カルチャーセンターで、渡辺一郎代表理事の講演会があり、そのあと九州支部懇親会を開催。詳細は次号。

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

① 本会報の発行 当面年四回。

② 例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

③ その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 ○○一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

投稿規定

●会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお委せねがります。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

●一頁は、二段組三字×二六行×二段で一六二字、三段組二〇字×三〇行×三段で一八〇〇字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

*本誌の編集委員は次のとおりです（50音順）

安藤由紀子（元国会図書館憲政資料室）・伊能陽子（伊能家）・香取禱良（前佐原市教育委員会次長）・小島一仁（佐原市史編纂委員長）・齋藤仁（学習院女子短大）・佐久間達夫（元伊能記念館館長）・清水靖夫（立教高校教諭・法政大学講師）・芳賀啓（柏書房専務取締役編集長）・渡辺一郎（伊能日本図探求会代表・会社会長）

編集後記

紅葉の候、会員の皆様いかがお過しでしょうか。

九月十二日佐原にて秋季総会、ニッポンを歩こう出立記念の催しがありました。総会に先立ち佐久間さんのご案内で会員は佐原のまちを歩きました。利根川の土手に上がると忠敬が測量した河川敷から吹いてくる風がとても心地よく、なぜか懐かしく感じられました。

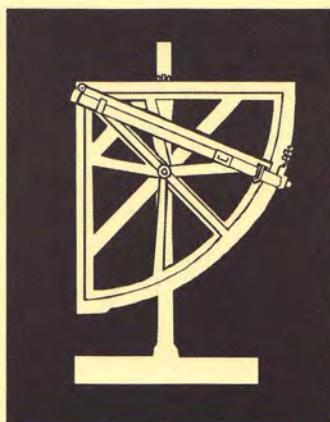
総会後は今も日常の商売が営まれていながら江戸の名残を漂わせている商家のまちをぶらりぶらり、みたらし団子を食べながら路地奥の常夜燈に「かつての道はここでは」と思いを馳せながらめざすは黒切りそば。土間と太い梁が圧巻の「よくら屋」さんでの懇親会。屋台料理と地酒を堪能した帰り道、夜舟に柳が似合う小野川は暗く静けさを増しコオロギの鳴き声がいつまでも耳の奥に残りました。お土産に買った熊手で何をかき集めようかしら？

（岡）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.17 Autumn 1998



ESSAY 1

- A Memory of Mr. INOH Takashi OGURA Yoshihiko 1

TOPICS 1

- The General Meeting of the Society NAKAMURA Chuya 2
The News of *Shibayama Diary* HOTTA Kiichi 4

LOCAL MATERIALS

- The Case of Surveying Kaga Clan KAWASAKI Michiyo 6
The Two Topics of the Herald WATANABE Ichiro 11

TOPICS 2

- Walking Member's Selection SATO Yoshinao 13

MATERIALS

- Family Documents 10
KUWAHARA Takatomo ANDO Yukiko 14
The Wind of Yamagawaminato INOH Yoko 19

ESSAY 2

- Was pacing off a weak point for Mr. INOH? NAGANO Tatsuyo 24

A LETTER TO THE AUTHOR

..... OUCHI Shigeo 28

THE SEARCH FOR INOH'S MAPS

..... WATANABE Ichiro 32

OTHER NEWS

..... 33

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY